

第1回

東京大学 安田講堂

大臣官房文教施設企画部計画課

田口 実穂

はじめに

国立大学の構内を歩いていると、古い建物がひっそりと佇んでいるのに気がついたことはありませんか。国立大学には、明治から昭和初期にかけて建設された建築が、数多く現存し、その数は棟数にして667棟、全国55大学に点在しています。しかし、これらの建築はその存在をあまり知られていないのが現状です。

明治以降の日本の大学建築は欧米諸国の影響を受け、その姿を劇的に変えていきました。まさに近代は、大学教育の受け皿でありその象徴となる大学建築の土台をつくった時代といえ、その建築には先人たちのさまざまな思考錯誤が重ねられています。

本連載では、国立大学の近代建築の魅力を、建築様式や用途、設計者や創立者、現在の活用方法など、毎号さまざまな視点から紹介していきます。

初回は、日本の近代的な大学の先駆けとし

て、特に多くの近代建築が存在している東京大学を2号連続で紹介します。

安田講堂

東京大学の近代建築といわれると、安田講堂を思い浮かべる人は多いのではないのでしょうか。安田講堂は正式名称を東京大学大講堂といい、正門から銀杏並木を通り抜けた正面の、本郷キャンパスのほぼ中心部に位置しています。1925（大正14）年、安田財閥の創始者である安田善次郎の寄付を受け、同大学出身の建築家である内田祥三（とみさけ）の設計により、当時最先端の技術をもって建築されました。

安田講堂は、正面入口のアーチや茶褐色のレンガの壁面、八角形の塔型の柱を配した塔屋など重厚的な印象で、長い間東京大学のシンボルとしてキャンパスイメージを牽引してきました。

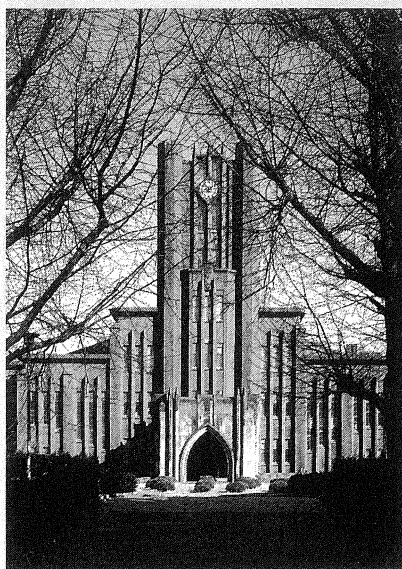
しかし、東京大学の構内をよく観察しながら

歩いていると、総合図書館、法文学部1・2号館、法学部3号館、工学部列品館、工学部1号館など、安田講堂と同じような特徴をもつ建築が数多く存在することに気がつきます。

じつは、これらの建築は安田講堂の設計者である内田祥三によって設計された建築なのです。内田祥三は東京帝国大学総長も務めた人物であり、関東大震災後の東京大学のキャンパス計画をたてたほか、東京帝国大学営繕課長として東京大学に関連する40棟もの建築を手掛けています。同じキャンパス内の建築に同様のデザインや建築材料を用いることにより、キャンパス全体に統一感をもたせているのです。

東京大学に訪れる機会があるときは、同様の特徴をもつ建築を探しながら歩いてみてください。いつもと違った東京大学がみえてくるかもしれません。

※平成22年5月1日現在



安田講堂（出典：東京大学百年史通史二）